

Where're the artists goin'?

「作者の死」

“The Death of Artist”

森村・川村ゼミグループ発表 4月26日(水)

元島 小川 小原 桑原 田中

1. はじめに

私達は今回、モダニズムからポストモダニズムのアートへ時代が移行していった時、語られていた“作者の死”という言葉に着目しました。当然ですが、これは作者が実際に他界するといった意味ではありません。では、何をもって“死”と呼ぶのでしょうか。

私達の班では、この“作者の死”を、“作者と作品の関係性が変化した”と捉えることにしました。それによって、アートはどう変わっていったのか。“作者の死”という観点から、モダニズムからポストモダニズムのアートの変遷を追い、そこから現代のアートとの関係性を追究していきたいと思います。

2. アートが変わった：外的要因

1960年代のアートを取り巻く状況

{高度経済成長 大量生産・大量消費 アメリカ的資本主義社会}の台頭

→アートが大衆というものを無視できなくなってくる

(ex: 娯楽映画 広告 漫画 イラストレーション etc)

それによって起こった手法

<消極的>

- ・ パスティッシュ…思想的、形式的独創性や、個人の感性を介在せずに、過去を、その歴史の重みとは無関係に、スタイルとしてだけ装飾的に引用する表現

→主体性なき表層の戯れ

モラルや主体性は持ち合わせていない≠パロディ (パロディの特徴がテキストと作品との関係が差異の強調であるのに対し、パスティッシュの特徴はテキストと作品の関係が模倣的であり、対象としたテキストとの差異よりも同一性を強調する)

パロディとは異なり模倣に嘲弄的な意図は含まず対象に対し敬意を持つ

<前衛的>

- ・ アプローチーション…盗用。作品化されているものからイメージを借用し、作品を構成する表現

→イメージを別の文脈に置き換えることで意味を変化させる

既成の価値観を媒体している表象の洗脳的な機能を暴き出す批判的方法

一般に流布している既製品、広告、メディアや著名な芸実作品に付随するイメージの組み合わせを用いて新しい作品を作ろうとする企て

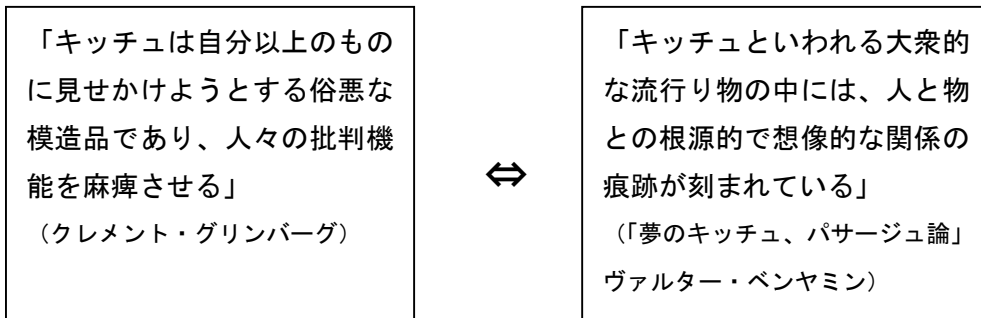
ex: 先進的な作品——*デュシャンの泉

<将来的>

・→キッチン…安っぽくするの意。高級品を真似て安易に作られる悪趣味な家具や小物などの消費材

・→「意図しないキッチン」「見方としてのキッチン」

→キッチンに対する対立意見



これらのような表現手法の台頭が、結果的に見たとき作者が死んだと言われる原因ではないのだろうか

→ポストモダンの時代において作者は…

「主体を自らによって自分の外に存在する世界が自分の意識や制作に与える影響と置き、それを考察する芸術と置いた」⇒“コンセプチュアル”な要素を含む

この作者の作品に対する概念の意向は、時代背景や前衛的姿勢による流動ではない、自発的な異動である。それらが目立ったが故、「作者の死」という言葉が出てきたと考える

3. アートが変わった：内的要因

a. 「主体の死」…主体とは何か？

「主体」：性質、状態、作用の主（広辞苑）

e. g. 「語る働きをする人間」

このとき、「語る」 → “作用”

「人間」 → “その主”、即ち”主体”

ここでは、

作品	→	性質・状態・作用
作者	→	主体

あるいは、

作品に与えられた意味	→	性質・状態・作用
作品	→	主体

⇒「作品」が死ぬ？

↓

矛盾

モダニズムの時代

- ・ 個人主義 ⇒ 個人的で固有のスタイルを発明することが基礎だった。
- ・ 個人の“同一性” ⇒ 作品が常に作者の代弁をしていた。

作品は作者(主体)の自我が表現されたもの。

“作品 ⇒ 作者”の同一性



ポストモダニズムの時代

個人的主体「死んだ」

- ・ 作品は常に作者の自我を代弁せず、“作品 ⇒ 作者”という同一性は消えた。
- ・ ユニーク性、個別性はもはや求められず、スタイルは統一化の流れを見せた。

b. 自律性

モダニズムの時代

[作品と作者を取り巻く関係性]

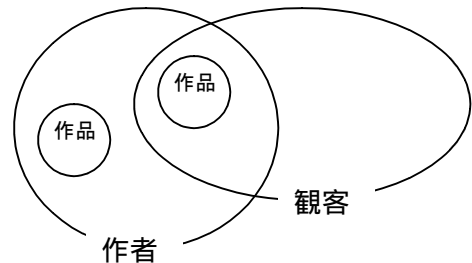
- * 作品は作者のコントロールの範囲内にあった

観客は作品を目にする、耳にする、手にする時に“作者の存在”から逃れられなかった

e. g. 美術館で誰かの「作品」を見るとき、かならずそこには題名、作者が記されていた。

会場には「作者」からのメッセージがあり、「作品」を見た観客は「作者によるコントロール」を受けている。即ち、観客は作者のコントロールの範囲外では作品を享受できない。

- * 作者一人だけで、作品を完結させられた。
他を要求せず、それだけで意味を成した。 ⇒ 自律



ポストモダニズムの時代

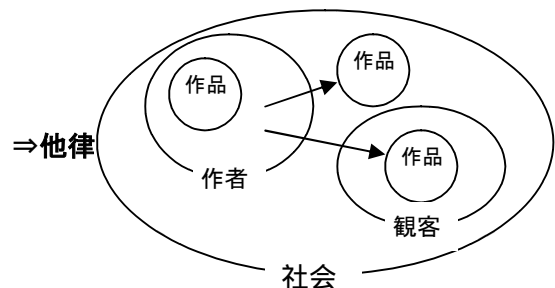
[作品と作者を取り巻く関係性]

- * 作品が作者のコントロールの範囲外へ

人々は日常の至る所で「作品」を目に、耳に、あるいは口にすることができたし、「作者」は自分の作品がどこでどんな人たちに受けられているか把握不可能。

e. g. 広告やポスターなどを見ても、そのデザインが誰に寄るものなのかは明記されていない。しかもその込められた意味も理解しがたい。

- * 作者一人だけで、作品を完結させられない。
観客をはじめとする周りの社会の影響を受け
作品に意味が生まれる。



4. 作品紹介

a. アプロプリエーションを用いた写真－フェミニズム

《untitled film steal》 シンディ・シャーマン

- ・ 自身がハリウッドのB級スリラーに出てくるような盗視される女性に扮し、画面の外にある危険をほのめかす形で撮った写真→Constructed photography

b. 「形態的自律性」からの脱却－アース・アート

「拡張する場のなかの彫刻」 ロザリンド・クラウス

- ・ ダイアグラムを用いてモダニズム彫刻を解説した後、70年代のアース・アートのコンセプチュアルな性格を読み解いた論文
- ・ 彫刻＝「場の喪失」(loss of site, sitelessness) →「拡張した場所」へ

→芸術を語る論点が「形態的自律性」から「思考やそれを媒介する行為」へと推移したことが、「モダン」から「ポストモダン」への推移の本質とした時、アートはどう変わったのか。そして作者と作品の関係性はどう変わったのか…

5. 考察

今回私たちは、「作者の死」という観点からモダニズム、ポスト・モダニズムのアートの変遷について考えてきたが、「作者の死」が語らえた1960年代とはまた異なる、現代における作者と作品の関係性について各々が考えた考察をここで発表したいと思う。

考察1 小川慶太

私は作者の死というものを、比較的広い視点から見ていこうと思います。

まず、私は「作者の死」を、「作者の完全なる自律性の喪失」という意味でとらえました。とすると、「作者の生」とは作品が作者に属し、独自に自律している状態を指すこととなります。しかし人間は関係性の中で生き、作られていく面があることは否定できません。作者が生きた時代背景、環境、国籍、性別・・様々な力が働き、作者のパーソナリティ形成に大きな影響を及ぼし、作品にもそれは投影されます。そうすると、作者の完全なる自律性は崩壊し、作者は死んだということになります。しかしそれはポストモダン時代に新しく生まれた状況ではなく、ポストモダンの時代に発見されたものということができます。

私は現代に至るまで、作品は作者自身の自律性と社会的な力が衝突するフィールドであったと考えます。つまり作者は死んだのではなく、現在にいたるまでその闘いに負け続けてきたのではないかと思います。なぜなら作者の独自性というものは社会に生きる中でつくられているため、作者が求める「作者の完全なる自律性」は存在しないはずだからです。

考察2 小原章史

作者と作品の関係性を考えてみようと思う。

モダンの時代には、作品と作者の関係は強固でした。そしてポストモダンの時代では、作者は死に作品が一人歩きをしたと書いてあります。

しかし私が思うに、作品に観客ないし作者以外の力が働いていたとしても、作者というのはその結果がどうであれ見えていると思います。それが見えて、目指す故にそれらを利用し作品を作り上げたのではないのでしょうか。この工程は全て作者の想定範囲内で起こっているのだと感じました。だから観客(=客体)は作者の掌の上で踊っていたに過ぎず、作者からしたら作品との関係はその第三の力も含めてちゃんとモダニズム期と同じで強いイコールで結ばれているように思います。

考察3 田中 茂裕

高度経済成長時代において、確かにキッチンやパスティッシュなどの対等によって、従来の様々な画一的で“作者=作品”と取れる自律性を博していたアート作品というものが、盗用されそれらしい形に姿を変え大衆化したのは事実であった。がしかし、それらは、時代背景を捉えた作者の前衛的産物であり、その前衛という姿勢とは、その時代時代によって姿かたちを変容させるものではなかったのであろうか。つまりポストモダニズムの時代には、「モダニズム時代に捉えられていた自律性」は機能しないものであり、また作者はその時代にそれを逆手に取ること(アプロプリエーションなど)で、作品として自立させ、批判方法の一つとしてその手法を用いたわけであり、作者が死んだ、というのは今、再度解釈するときには、もはやそれを言う人の価値観が時代背景、前衛的姿勢を無視した保守的思考であったのではないかと疑問を抱く。そして作者の自律性のスタイル、または置き位置、立ち位置が移動した、変わった、という意味とも取れるのではないのであろうか。

考察4 桑原 翔

●「作者」とは？

	モダン	ポストモダン
・ 作品を作る人	○	△
・ 作品の発案者	○	△
・ 作品の発信者	○	○
・ 作品に意味を与える人、決める人	○	×
・ 作品を終始コントロールできる人	○	×

上の表から分かることは、モダンからポストモダンに移行する時に、作者は作品に意味を与える唯一の存在ではなくなったし、且つ作品を終始コントロールすることができなくなってしまった、ということ。即ち、「作者の死」が意味することは、作品に意味を与える人、決める人、また作品を終始コントロールできる人、という意味での「作者」

がなくなったことを意味するし、これを「死」と捉えるよりは、作者という概念、そのスタイルが変わった、と考える方が良い。

作品を作る人、としての作者は、いつの時代にも生き続けるでしょう。

このように、作者と作品をめぐる様々な考察は、総てモダニズム、それに対抗し生まれたポスト・モダニズムの影響を受けており、現在のアートを語る上での個々の相対的な価値判断に過ぎない。これは、現代のアートを語る上でも重要な要素として考えられるが、作者＝作品か、作者≠作品かという二項対立の問い自体が非常にモダン的な考え方であり、モダニズムの求めたアートに対する絶対的価値判断だけでは、現代のアートを語ることは難しいということ、今回は考察を通して改めて提示してみた。そのような意味において、私たちのアートに対する捉え方は、相対的であり、ポスト・モダン的であるといつてもよいかもしれない。

デュシャンが「泉」によって問いかけた「アートとは何か」という問いが現代においても有効だと考えられるのは、常にその問いを持ち続けた者によって、時代や社会を越えてアートの形態・考え方が変化するといった要素を持ち合わせているからではないだろうか。その問いを突き詰めた時、モダニズム、ポスト・モダニズムという時代を通した上でなお「アートとは何か」という問いが出ることを、デュシャンは期待しているのかもしれない。

【参考文献・参考サイト】

- ・ Midori Matsui 『Art : Art in a New World』(朝日出版社 2002)
- ・ Edited by Hal Foster 『反美学ーポストモダンの諸相』(劉草書房 1987)
- ・ 山梨 俊 『現代絵画入門 二十一世紀美術をどう読み解くか』(中央公論社 1999)
- ・ 海野 弘・小倉 正史 『現代美術 アール・ヌーヴォーからポストモダンまで』(新曜社 1988)
- ・ 美術手帖編集部 『21世紀のアートがわかる 現代美術の教科書』(美術出版社 2005)
- ・ 『Cindy Sherman』(PARCO 出版 1987)

・ 現代美術キーワード

<http://www.dnp.co.jp/artscape/reference/artwords/index.html>

・ 真贋のはざま

http://www.um.u-tokyo.ac.jp/publish_db/2001Hazama/